

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月6日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（A）

研究期間：2008～2011

課題番号：20241057

研究課題名（和文）デニズンシップ：非永住・非同化型広域移民の国際比較研究

研究課題名（英文）Denizenship：international migrants and host societies

研究代表者

高橋 均（TAKAHASHI HITOSHI）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：50154844

研究成果の概要（和文）：戦後、欧米先進諸国に向けて、開発途上国出身の多くの移民が流入し、かれらを文化的に同化することは困難であったため、同化ではなく統合を通じてホスト社会に適応させようとする《多文化主義》の実験が各地で行われた。本研究課題はこのような《多文化主義》が国際標準となるような《包摂レジーム》に近い将来制度化されるかを問うものである。結論として、(1)《多文化主義》の背景である移民のエンパワーメントは交通・通信技術の発達とともになお進行中であり、いまだバックラッシュを引き起こす危険を含む。(2)第一世代はトランスナショナル化し、送出国社会と切れず、ホスト社会への適応のニーズを感じない者が増えている。(3)その反面、第二世代はホスト社会の公立学校での社会化により急速に同化し、親子の役割逆転により移民家族は不安定化する。このために、近い将来国際標準的な《包摂レジーム》の制度化が起こる可能性は低い。

研究成果の概要（英文）：The postwar massive inflow of third world immigrants to Europe and North America, which appeared hard to assimilate, have led the host societies and governments to pursue immigrant adaptation without cultural assimilation through ‘multicultural schemes’. We have inquired if these schemes will be institutionalized in the near future sufficiently to transform into an internationally standardized ‘inclusion regime’. Our conclusion is negative because: (1) the historical process of newcomer empowerment is still in progress, which is susceptible to backlashes at any time; (2) the growing transnational attachment of many recent first-generation immigrants makes the future less predictable, who feel less and less the needs to adapt themselves to host societies; and ironically, (3) the rapid assimilation of second generation children through socialization in host societies’ public school systems, which would destabilize immigrant families, the key unit of adaptation, between them and transnational parents.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2008 年度	6,700,000	2,010,000	8,710,000
2009 年度	9,800,000	2,940,000	12,740,000
2010 年度	9,800,000	2,940,000	12,740,000
2011 年度	8,000,000	2,400,000	10,400,000
年度			
総 計	34,300,000	10,290,000	44,590,000

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：移民・ヒスパニック・欧州ムスリム・ニューカマー

1. 研究開始当初の背景

(1)日本社会の少子高齢化を背景に、外国人労働力の受け入れについての議論が始まっている。しかし、日本の移民研究は必ずしもこの時代の要請に答える体制にない。その成果は、主に日系の移民集団の事例個別研究や、労働市場分節化論（およびその変形であるグローバルシティ論）を中心とする理論構築に集中しており、実際に移民を受け入れたときに社会がどうなるか、という問に即答できる状況にはない。

(2)欧州は1945～1973年、米国は1965年移民法の影響が顕在化した1970年代～現在、《戦後移民》と呼ばれるかつてない規模の移民流入を経験した。この現象を日本は経験しておらず、そして《戦後移民》の中で生まれた欧米の移民研究の蓄積のうち、ごく一部しか日本の移民研究は消化していない。

(3)《戦後移民》の過程で各地に、現地文化に同化しようとしないう移民集団が生まれ、これに对应していわゆる《多文化主義》のモデルが示された。同化ではなく「統合」を通じての「適応」を追求するものであり、手段は団体形成を通じてのホスト国家や地方自治体とのネゴシエーションであり、ホスト市民社会のNGOや人権団体の支援を受けて実現されるとされる。目下このモデルは全世界で実地検証中であり、現時点でのその結果を検討する必要がある。

2. 研究の目的

(1)本研究の目的は、《同化主義》にかわる《多文化主義》のモデルが、《戦後移民》から生じて現在にいたる状況を、どれほど理論的に説明し得、かつ政策的に処置し得ているかを検証する。

(2)その際の検討課題は以下の通りである。(a)《非同化移民》とホスト国家社会との間にはどのような力関係が生じ、そこからどのようなインターアクションやネゴシエーションが生じるか。(b)それらのインターアクションやネゴシエーションを制度化し、整合性のある《包摂レジーム》（これを仮にデニズンシップと呼んだ）を構築することができるか。(c)できるとすればその結果は従来の同化→市民権のアプローチが予想するところとはどのように異なるか。

3. 研究の方法

(1)移民研究ほどタコツボ化しやすい分野はない。研究対象がある送出国・地域からあるホスト国・地域への移民集団にならざるを得ないので、いわばタテヨコに〈二重の細分化〉を受けるからである。こういう分野でこそ、地域文化研究の「地域横断・分野横断」の共

同研究アプローチが成果をあげることが期待される。

(2)《先端事例》としてアメリカ合衆国におけるヒスパニックとアジア系、ヨーロッパにおけるムスリムを、《古典的事例》としてインド洋圏における華僑・印僑を、《参照事例》としてアフリカン・アメリカンと在日・韓国朝鮮人を取りあげ、政策提言に結びつくような事実関係の研究者と、公共圏で交換される言説の研究者との双方を加えた分野横断的な研究組織を組む。

(3)現地調査、文献の収集と調査、研究会を重ね、最終的には国際シンポジウムを実施する。

4. 研究成果

(1)1980年代にヨーロッパで、1990年代にアメリカで、非常に警戒的な移民関係の言説が生み出されるにいたった。これは《戦後移民》の衝撃によるものであった。とりわけ、ゲストワーカーは、当初ホスト国家にも当の労働者にも全く定着する意思がなくても、結局相当部分が定着し、新規募集をやめてもなお、家族呼び寄せによって移民集団の拡大は続く、という、予測されなかった新事実が判明した結果であった。

(2)移民集団は、長期的トレンドとして、交通通信手段が発達するにつれてエンパワーされていく傾向にある。この過程で近年とくに決定的であったのは、1950～60年代のアメリカ公民権運動を主な契機として、少数者には選挙政治の枠を越え、活動家を介して主流社会とネゴシエーションする権利があるという考え方が国際的に認められるようになったことである。しかしいづれのホスト国家社会においてもこの考え方はネゴシエーションの過程にあり、制度化にいたっていない。このために常にバックラッシュが生じる可能性がある。

(3)《多文化主義》のアプローチは、グローバル化の進展の結果、トランスナショナルリズムの挑戦を受けている。国際間の移動や通信のコストが以前には考えられないほど低くなった結果、たとえばゲストワーカーはホスト社会に《適応》する必要をかつてないほど感じなくなり、《同化》はおろか《多文化主義》的な団体形成を通じての《統合》さえも億劫に感じるような雰囲気が出てきている。他方において、2000年代に入って送出国の国家と地方自治体が海外送金の価値に目覚めた。北から南への金の流れの中で移民の送金は、今や民間直接投資とほぼ同額、政府開発援助の倍額に達している。このために移民送出国は突然二重国籍を認めるなど制度転換をしており、その移民への影響も大きい。

(4) ところが移民がトランスナショナル化する一方で、家族呼び寄せから生まれる第二世代（いわゆる第一・五世代——移住時に生まれていたが就学前だった子女——を含む）においては、むしろ《多文化主義》以前の形の同化が進む傾向がある。第二世代はホスト国家社会の公立学校システムに入学し、そこでは同化しなければいじめに遭うからである。この結果家族内で親よりも子の方が同化の程度も言語能力も高く、役所での手続やその他の交渉場面で親は子に頼るようになり《役割逆転》が生じる。場合によっては子は親を恥じるようになり親の管理を忌避する。その結果ホスト社会の若年層のギャング的カウンターカルチャーに染まり、ある学者が言う《下向きの同化》の道をたどることがある。

(5) 以上の考察から、移民集団とホスト社会との《多文化主義》インターアクションとネゴシエーションは、いまだバックラッシュの危険をはらんだ流動的な段階にあり、さらに、第一世代のトランスナショナリズムと、第二世代以降の《下向きでありうる同化主義》の双方の挑戦を受けている。このため、制度化を遂げて国際標準としての《包摂レジーム》に近い将来に成立するか、という問に対しては、否定的に答えざるを得ない。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 件）

荒このみ、日系アメリカ人強制収容とアンセル・アダムズの写真記録、立命館言語文化研究、第 23 巻 1 号、2011、47-90、査読有

MURATA Yūjirō, The Regional Structure of the 1911 Revolution: The North and the South in Chinese History、Journal of Cultural Interaction in East Asia、vol.3、2012、7-18、査読有

ENDO Yasuo、New Perspectives on American Studies: Introduction、Nanzan Review of American Studies、vol. 33、2011、5-11、査読有

遠藤泰生、大西洋から太平洋に：グローバル時代におけるアメリカ研究の行方、オデッセウス、第 15 号、2011、5-11、査読無

遠藤泰生、移民・難民・市民権——環太平洋地域における国際移民：特集にあたって、アメリカ太平洋研究、vol. 12、2012、1-17、査読無

遠藤泰生、書評論文「相対化と新しい総合：有賀夏紀・紀平英作・油井大三郎編『アメリカ史研究入門』（山川出版社、2009）」、アメリカ太平洋研究、vol. 12、2012、5-7、査読無

遠藤泰生、「歴史と和解—歴史教育の現在」：東京大学グローバル地域研究機構公開シンポジウム報告、アメリカ研究振興会会報、no. 71、2011、p.2、査読無

増田一夫、ジャン＝ピエール・デュビュイ講演会報告 「悪意なき殺人者と憎悪なき被害者の住む楽園—ヒロシマ、ナガサキ、チェルノブイリ、フクシマ」、教養学部報、542、2011、p.1、査読無

増田一夫、書評 <本の棚>菅原克也著『英語と日本語のあいだ』、教養学部報、540、2011、p.3、査読無

山本博之、地域研究方法論—想定外に対応する「地域の知」、地域研究、12 巻 2 号、2012、18-37、査読有

山本博之、先行研究をどう読むか—東南アジアのナショナリズム論を例として、地域研究、12 巻 2 号、2012、98-115、査読有

YAMAMOTO Hiroyuki、The Jawi Publication Network and Ideas of Political Communities among the Malay-Speaking Muslims of the 1950s、Journal of Sophia Asian Studies、vol.27、2010、51-64、査読有

山本博之、災害対応の地域研究：被災地調査から防災スマトラ・モデルへ、地域研究、11(2)、2011、49-61、査読無

YAMAMOTO Hiroyuki、Hau, Caroline S. & Kasian Tejapira (eds.): Traveling Nation-Makers: Transnational Flows and Movements in the Making of Modern Southeast Asia(分担執筆)、Kyoto University Press、2011、233-247、査読無

外村大、第 7 章 朝鮮人労働動員をめぐる認識・矛盾・対応 一九三七～一九四五年、黒川みどり編著：近代日本の「他者」と向き合う、2010、200-226、査読無

村田雄二郎、日本の対華二一カ条要求と五四運動、『岩波講座 東アジア近現代通史 第 3 巻 戦争と改造の時代—1910 年代』、岩波書店、2010、324-343、査読無

孔祥吉、村田雄二郎、京師白雲觀与晚清外交、社会科学研究(成都,四川省社会科学院)第2期、159-164、2009、査読有

増田一夫、「生き延びること」の政治経済学—グローバルゼーションと2つのサヴァイヴァル、高桑和巳(編): 生き延びること—生命の教養学Ⅴ、慶應義塾大学出版会、査読無、147-174、2009

山本博之、人道支援活動とコミュニティの形成、林勲男編著: 自然災害と復興支援、明石書店、61-382、2009、査読無

外村大、トミヨンフフェ・ユンヘドン編: 歴史学の世紀:20世紀韓国と日本の歴史学(韓国語、分担執筆)、高麗書林、355-394、2009、査読無

外村大、朝鮮人労働者の「日本内地渡航」再考—非準備型移動・生活戦略的移動と労働力統制、韓国朝鮮の文化と社会、査読有、第7号、pp.62-91、2008

外村大、第一部「朝鮮」総説、日本帝国の渡航管理と朝鮮人の密航、蘭信三(編)『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学をめざして』、査読無、不二出版、pp.3-30、pp.31-62、2008

外村大、羅京沫、1970年代中期沖縄の韓国入季節労働者—移動の背景と実態、移民研究年報、査読無、第15号、pp.77-95、2009

荒このみ、認知不能の恐怖(Fear of Agnosia)—人種記号(レイス・マーカー)とトニ・モリスンの「レンタティフ」—、総合文化研究(東京外国語大学)、査読無、11号、pp.31-60、2008

荒このみ、「〈パーボ〉、その攻撃的沈黙の視点」、『メルヴィル後期を読む』中央大学人文科学研究所研究叢書43、査読無、45-78、2008

孔祥吉、村田雄二郎、従日本両国糖梢案看《国聞報》的内幕(上)(下)、学术研究(広州、広東省社会科学院)、査読無、7月号、9月号、95-109、81-98、2008

村田雄二郎、五四時期国語統一論争—從“白話”到“国語”(趙京華訳)、東亜人文(北京、生活・新知・読書三聯書店)、査読有、第1輯、135-164、2008

山本博之、「民族の政治」は終わったのか(総括)、BN 圧勝の意味と「サバ人のサバ」のゆくえ、「民族の政治」は終わったのか?:2008

年マレーシア総選挙の現地報告と分析、日本マレーシア研究会ディスカッションペーパー1、査読無、4-12、141-150、2008

増田一夫、「人種」なき共和国—試練に立つフランス的統合—、『人種と人種主義を問う』(東京大学ドイツ・ヨーロッパセンター編、査読無、87-99、2008

森山工、〈誰〉をめぐる問いかけ—マダガスカルの歴史から—、山影進・高橋哲哉編『人間の安全保障』、東京大学出版会、査読無、21-33 2008

[学会発表](計 件)
Nobuhiko Adachi, Nach der Katastrophe -Misstrauen, Proteste und Hoffnungen (ドイツ語)、Ein transnationales Symposium 'Fukushima-Diskurse II Technik, Gesellschaft und Medien' (招待講演)、2012年3月5日、Universitätsclub Bonn

Nobuhiko Adachi、Germanistik als Wissenschaft einer ostasiatischen Bürgergesellschaft nach der Katastrophe (ドイツ語)、Verantwortliches Forschen und Handeln in asiatischen Bürgergesellschaften(招待講演)、2012年3月24日、Hankuk University of Foreign Studies

村田雄二郎、辛亥革命の空間構造——中華の再編と近代、東アジア文化交渉学会第3回年次大会 特別講演、2011年5月8日、武漢、華中師範大学近代中国研究センター

外村大、日本における移民像と教育、日仏シンポジウム:移民と国境、2011年4月16日、日仏会館

MASUDA Kazuo、Nouvelles scènes intellectuelles françaises. Dialogues asiatiques. L'intellectuel en question (フランス語)、日仏シンポジウム:知識人を問う (招待講演)、2011年11月10日、日仏会館

増田一夫、カストロフィー以後の『移民と国境』を遠望して、日仏シンポジウム:移民と国境 基調報告、2011年4月16日、日仏会館

山本博之、Peranakan in the Malay world: Fine-tuner of Nationality and Ethnicity、The 6th International Conference on Asian Studies、2011年4月3日、Honolulu, Hawaii

山本博之、サバのテレムービーに見る「陸の

民」と「海の民」、日本マレーシア学会第 20 回研究大会、2011 年 12 月 11 日、東京外国語大学

村田雄二郎、清末立憲運動における日中関係——張謇を中心に、国際シンポジウム「従近現代日中文化交流看現代性及身分認同的探索」、2010 年 11 月 13 日・14 日、香港中文大学日本研究学系（香港）

山本博之、資格としての民族:マレーシアにおける「連邦制」の展開、東南アジアとヨーロッパのリージョナリズム:相関地域研究の試み、2009 年 10 月 31、東京大学

YAMAMOTO Hiroyuki, Earthquake as an Opportunity of Social Reform、Conference of the Earth and Space Sciences、2010 年 01 月 08、バンドン工科大学(インドネシア)

外村大、在日コリアンをめぐる問題から考える日本の戦後史、東京大学ドイツヨーロッパ研究センター主催国際シンポジウム「日独比較研究の可能性:市民社会の観点から」、2010 年 03 月 11 日、東京大学駒場 I キャンパス

村田雄二郎、漢字簡化浅論-畳一介簡体字、「20 世紀中国の政治と文化」国際シンポジウム、2008 年 10 月 26-29 日、北京、清華大学

村田雄二郎、哀師白雲觀与晚清外交、「近代知と制度システムの転換」国際シンポジウム、2008 年 11 月 28 日-30 日、広州、中山大学

YAMAMOTO Hiroyuki, Jawi sebagai Pembatas, Jawi sebagai Penghubung、Persidangan Bahasa Melayu dalam Perspektif Antarabangsa Tahun 2008、2008 年 9 月 20 日、Kuala Lumpur

YAMAMOTO Hiroyuki、Jawi Publication Network and the Ideas of Political Communities among Malay-S、IAS-AEI International Conference: New Horizons in Islamic Area、2008 年 9 月 22 日、Kuala Lumpur

増田一夫、Laicite et integration. Quelques reflexions a partir de la <Declaration universelle>、121 世紀国際ライシテ宣言とアジア諸地域の世俗化(東京大学グローバル COE 共生のための国際哲学研究教育センター UTCP)、2008 年 11 月 28 日、東京

森山工、「人間の安全保障」に人文知は何かできるか、シンポジウム「人間の安全保障」の世紀へ(東京大学大学院総合文化研究科

「人間の安全保障」プログラム)、2008 年 11 月 29 日、東京

〔図書〕(計 件)
孔祥吉・村田雄二郎、『清末中国と日本——宮廷・変法・革命』、東京：研文出版、362、2011

外村大、朝鮮人強制連行、岩波書店、258、2012

LIM, David and YAMAMOTO Hiroyuki (eds.), Film in Contemporary Southeast Asia: Cultural Interpretation and Social Intervention、Routledge、221、2011

国際高麗学会(編)(外村大編集委員・分担執筆)、在日コリアン辞典、明石書店、453、2010

YAMAMOTO Hiroyuki, Anthony Milner, KAWASHIMA Midori, ARAI Kazuhiro (eds.), Bangsa and Umma : Development of People-Grouping Concepts in Islamized Southeast Asia、Kyoto University Press、270、2011

Yusuke MURAKAMI, Hiroyuki YAMAMOTO, Hiromi KOMORI (eds.), Enduring States in the Face of Challenges from Within and Without、Kyoto University Press、299、2011

飯島渉・久保亨、村田雄二郎、『シリーズ 20 世紀中国史』全 4 巻、東京大学出版会、232、230、230、254、2009

荒このみ、マルコム X-人権への闘い、岩波書店、p.237、2009

高橋均、網野徹哉、世界の歴史 18 ラテンアメリカ文明の興亡、中央公論新社[中公文庫]、p.589、2009

遠藤泰生、アメリカの歴史と文化、放送大学出版協会、272、2008

荒このみ、Ralph Ellison and Individuality、南雲堂、227、2008

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 均 (TAKAHASHI HITOSHI)
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：50154844

(2)研究分担者

荒 このみ (ARA KONOMI)
東京外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号：90119529

山本 博之 (YAMAMOTO HIROYUKI)
京都大学・地域研究統合情報センター・准教授
研究者番号：80334308

(3)連携研究者

増田 一夫 (MASUDA KAZUO)
研究者番号：70209435
東京大学・大学院総合文化研究科・教授

遠藤 泰生 (ENDO YASUO)
研究者番号：50194048
東京大学・大学院総合文化研究科・教授

足立 信彦 (ADACHI NOBUHIKO)
研究者番号：10175888
東京大学・大学院総合文化研究科・教授

村田 雄二郎 (MURATA YUJIRO)
研究者番号：70190923
東京大学・大学院総合文化研究科・教授

外村 大 (TONOMURA MASARU)
研究者番号：40277801
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

森山 工 (MORIYAMA TAKUMI)
研究者番号：70264926
東京大学・大学院総合文化研究科・准教授